

ものごとができる・できないを段階的に考える

開倫塾

塾長 林 明夫

1. おはようございます。開倫塾塾長の林明夫です。今朝も「開倫塾の時間」をお聴きいただき、ありがとうございます。
2. 今日は、ものごとができる・できないとはどんなことかについて段階的に考えてみたいと思います。例えば、辞書を使うことができるという前提で考えてみましょう。意味のわからないことばがあったら気持ちが悪いと思い、辞書で調べてみる。調べたことをノートやカードに書き写す。そのノートやカードをいつも1ページ目・1枚目から繰り返し繰り返し勉強し直す。そうすると、ことばの数が増えます。

私のお勧めは、1日に10回辞書を引くことです。すると、1か月で360個近いことばが調べられて身に着く可能性があります。1年では3650個のことば、3年かければ1万個ぐらいのことばが身に着くこともあります。そんなことで、1冊の辞書からいろいろな可能性が広がります。
3. 逆に、辞書を引くことができないと、可能性は狭まります。そもそも辞書を使えない理由としては、辞書についての知識がないことが考えられます。例えば、国語辞典はあ、い、う、え、お順にことばが並んでいます。英語辞典はa、b、c順にことばが並んでいます。そういう仕組みがわからないと、辞書を引くことがなかなかできません。それがわかっても、何十回か辞書を引く練習をしないと身に着きません。パッパッと引ける方となかなか引けない方がいますが、それは練習量の差です。これは、電子辞書も一緒です。

このように、ものごとができる・できないは、それについての知識があるか、スキルがあるかどうかで決まります。ですから、知識やスキルを身に着けることが第1段階です。
4. 第2段階は、知識やスキルは身に着いているが、それが一人ではなかなかできない・先生や先輩など教えてくれる方がいなければなかなかできないという状態のことです。例えば、先生がついていれば辞書を用いることができますが、一人ではなかなかできません。仕事でも、同じ職場に先輩がいたり教えてくれる方がいたりしないとできません。
5. 第3段階は、先生や先輩、教えてくれる方がいなくても一人で辞書が引ける、一人で仕事ができるようになる状態です。ただし、誰もいなくても辞書は引けるのですが、時々しかできません。

仕事も「一人でやりなさい」といわれたのになかなか上手くできず、できても時々しかできません。

6. 第4段階は、もう少し上にいき、必要なときに辞書を引いたり仕事をしたりすることができる状態です。ここまですると素晴らしいです。

7. もう少し上の段階もあって、それは完全に自分のものになっている・身に着いている状態です。一人で完全に仕事ができる・わからないことばがあったら気持ちが悪いと思い、条件反射的に辞書を引くという段階、誰にも何も言われなくても自然に体が動いて仕事や勉強をしている段階です。つまり、仕事でも勉強でも辞書を引くのでも新聞を読むのでも、習慣になっているので一人でスラスラできるようになります。

8. 知識やスキルが全くなくてできない・先生など教えてくれる人がいればできる・教えてくれる人がいなくてもできるが、ときどきしかできない・必要なときには一人でできる・最終的には習慣になり、その時間になったらそれをしているという感じです。

9. では、他の模範になるような完全な作業ができるという素晴らしい段階の上はあるのでしょうか。実はあるのです。それは、他の人に教えることができる段階です。一人でできるのも大事ですが、文化や仕事などでよいことがあったら他の人に教えてあげればそれが広まります。

教える場合も、1対1なら教えることができるのを **on the job training** といいます。次の段階で、クラス単位やグループ単位で「これはこんなことですよ」などと説明して「ああ、そうなのだ」と納得し、ではみんなで作ってみようねとなるのを **roleplaying** などといいます。

10. できる・できないにも、知識やスキルがなくて全くできない段階から人に教えることができる段階まで、いろいろな段階があります。仕事をしたり勉強をしたりするのも奥が深く、最初は誰も何もできないのですから、めげずに頑張ってください。